

[報告]

## カドミウム汚染の記録と記憶 ー清流会館から富山県立イタイイタイ病資料館へー

向 井 良 人

A View of Documents and Memories  
about the Cadmium Pollution as Itai-itai Disease

Yoshito MUKAI

熊本保健科学大学保健科学部共通教育センター

富山県立イタイイタイ病資料館は平成24（2012）年4月29日に開館した。いわゆる「四大公害」の資料館としては3番目の開館である。先行する水俣市および新潟県の水俣病資料館との比較を通して、公害の記憶を継承する取り組みと課題について示唆を得ることができる。イタイイタイ病の記憶と教訓を継承する取り組みを取材して、筆者は「四大公害」の一言では括れない事件史の厚みを感じると共に、継承への熱意が今後どのように伝わっていくかに関心を持った。

キーワード：イタイイタイ病，公害，資料館，語り継ぎ

### I. 緒 言

水俣市立水俣病資料館は1993（平成5）年1月、新潟県立「環境と人間のふれあい館」は2001（平成13）年1月、富山県立イタイイタイ病資料館は2012（平成24）年4月に開館した。四日市市は2014（平成26）年度内に市立「四日市公害と環境未来館」を開館する予定である。これで日本の高度経済成長期に「四大公害裁判」として知られた公害事件（水俣病，新潟水俣病，イタイイタイ病，四日市ぜんそく）の公立資料館が揃う。今後、各資料館の連携は「四大公害」をキーワードとして展開するだろう。しかし、四日市コンビナート稼働が高度経済成長期の1959年であるのに対して、水俣湾や阿賀野川の水銀汚染（水銀を触媒に用いたアセトアルデヒド製造）は1930年代に始まっている。神通川の鉍毒被害は1910年代以前にまで遡る。これらを指して1960年代末に「四大公害」という呼び名が使われるようになるには、当然のことながらそれに先行して「公害」の概念が形成され適用される必要があった。高度経済成長期に深刻化した汚染と破壊、そして相次いだ訴訟は「四大公害」の発見を促したのであって、同時期における発生を必ずしも意味しない。「四大公害」への関心は必然的に「経済成長の代償」という文脈を用意するが、それは個別の四つの事例の読み方を狭めることにならないだろうか。言い換えると、われわれはこれらの事例をどのような物語として読むことを欲し、今後どのように次世代へと語り継ごうとしているのだろうか。こうした関心のもと、イタイイタイ病対策協議会会長のお話を伺うと共に、イタイイタイ病資料館に取材した。

### II. 施設概要

イタイイタイ病資料館（以下「イ病資料館」）の施設は富山県国際健康プラザ（富山市友杉151番地）の一部である（写真1，写真2）。国際健康プラザは平成11（1999）年に開館した複合施設で、愛称は「とやま



写真1. 国際健康プラザ正面



写真2. イタイイタイ病資料館玄関前



写真3. 国際健康プラザ館内（生命科学館）



写真4. 国際健康プラザ前のバス停（とやま健康パーク）

健康パーク」である。敷地面積は約10.7haで、竣工当初は、国際伝統医学センター、生命科学館（写真3）、健康スタジアム、屋外健康づくり施設で構成されていた。このうち国際伝統医学センターは平成23（2011）年に閉館し、その施設を改装して平成24（2012）年4月に開館したのがイ病資料館である。なお、国際健康プラザのホームページでは、イ病資料館の開館から1年半が経過した現在でも、改装前の国際伝統医学センターの外観写真がそのまま「富山県立イタイイタイ病資料館」として掲載されているが、イ病資料館の外観は異なる。

イ病資料館が入る国際健康プラザはJR富山駅から直線距離で南に約8km、富山空港からは直線距離で約1kmの場所にある。近隣には能楽堂や総合運動公園もある。国際健康プラザ正面にはバス停（写真4）があり、富山駅南口からはバスで約30分だが、富山駅から1日2便、富山駅へは1日3便と少ない。停留所の名前は施設の愛称と同じ「とやま健康パーク」である。筆者が訪れたのは学校の夏休み期間で、家族連れの姿が随所に見られた。利用者のほとんどは自家用車を利用している様子である。この付近一帯はカドミウム汚染土壌で、農地復元工事の対象となった、いわゆる被害地域である。国際健康プラザの敷地は農地ではないため、工事は行われていない。復元工事の対象は米をつくる農地のみである。

### Ⅲ. 行 程

8月20日（火）

熊本駅8時4分発の新幹線さくら542号で新大阪駅に到着し、25分の待ち合わせで湖西線特急サンダーバード17号に乗車する。終点の富山駅には15時1分に到着した。富山駅は平成27（2015）年春の北陸新幹線開業を控えて工事中であった（写真5）。熊本も暑い富山も同様に暑い。富山駅の隣にある地铁ホテルにチェッ





写真5. 工事中の富山駅



写真6. 富山市の路面電車



写真7. 自転車市民共同利用システムのステーション



写真8. 国際健康プラザ屋外

クインし、すぐに駅前に戻ってタクシーでイ病資料館へ移動する。資料館までの所要時間は約20分であった。入館は無料である。16時から17時（閉館時刻）まで展示を見て回った。ジオラマと映像と絵本を併用した展示で、直観的に理解できるようになっている。展示ごとに紙媒体の資料も用意されており、持ち帰ることができる。国際健康プラザとイ病資料館の施設の関係については、実際に足を運んでみて初めて納得した。健康スタジアムのプールや温泉施設への人の出入りが盛んである。とやま健康パーク17時10分のバスで富山駅へ戻る。熊本市と同じ路面電車（写真6）と、熊本市では見かけない自転車市民共同利用システムのステーション（写真7）が共に印象的である。

## 8月21日（水）

イタイイタイ病（以下「イ病」）の患者団体であるイタイイタイ病対策協議会（以下「イタイ協」）の会長、高木勲寛氏を清流会館（富山市婦中町萩島684番地）に訪ねた。清流会館は昭和51（1976）年に竣工したイタイ協の活動拠点で、県に先立つイ病の資料館でもある。清流会館は国際健康プラザから神通川を挟んで西に約2.5kmに位置し、イ病の研究に取り組んだ萩野昇医師の萩野病院が近くにある。高木氏はイタイ協会長として県のイ病資料館との関わりも深い。県のイ病資料館竣工に伴い、清流会館からは3千種1万点の資料が寄贈されているとのことである。高木氏とは9時30分の約束で、余裕を持って20分ほど早く到着したのだが、すぐに応対してくださった。当初は90分ほどのつもりだったが、御厚意に甘えて結局2時間半ほどお話を伺った。患者団体が一つであること、原因企業と被害者団体の間に「緊張感ある信頼関係」が保たれていることなど、水俣病の事例とは異なる点も多く、比較しながら大変興味深かった。神通川の水質と農地の土壌は回復が完了し、新たにイ病に罹患する人は出ないが、毎年続けている検診でイ病と判明するケースが今もあり（昨年度に新規の認定申請が2件）、問題が終息したわけではないとのことである。清流会館を辞して



写真9. 婦中大橋と神通川

タクシーで国際健康プラザへと移動する。

初日はイ病資料館の展示を急ぎ足で見学する時間しかなかったので、あらためて国際健康プラザの施設全体を見て回った。建物の裏手に回ると広場や遊歩道が整備されている（写真8）。水遊び施設では家族連れが楽しんでいる。敷地は広く、夏の昼間に一巡りするとかなり汗をかく。空調の効いた建物の中に戻って暫し休憩した後、再びイ病資料館へ。副主幹の田中恒久氏の御厚意により50分ほどお話を伺うことができた。田中氏によれば、来館者の多くは富山県内からである。イ病資料館1年目の入場者は目標3万人に対して実績39606人と順調であった。

しかし県内の小学校約200校のうち、資料館を見学に来たのは約50校とのことである。県内の小学校からの見学を増やすことが課題のようだ。富山県の担当課がイ病資料館見学も含めた修学旅行の誘致をしている。富山空港はソウル便もあるので、韓国の学校からも見学があった。今のところ九州からの修学旅行はない。イ病資料館の語り部は7名で、患者家族（遺族）はいるが、患者本人はいないとのことである。

とやま健康パーク15時5分のバスに乗車。富山駅へ戻る途中、神通川周辺を歩いておこうと思い、バス路線で神通川に最も近いと思われる萩原バス停で下車する。時折雨がぱらつく中、折り畳み傘を出し入れしながら歩き、国道359号線の婦中大橋に至る（写真9）。川の所々に釣り人の姿がある。橋の上と河川敷の両方を行き来して神通川を眺めるなど1時間近く付近を散策した後、国道沿いを歩いて今泉バス停から再びバスに乗車、富山駅前へ戻る。

#### 8月22日（木）

この日は9時から約30名の団体の後ろについて、イ病資料館の団体向けプランを体験させてもらうことができた。副館長の村田信一氏による案内と展示解説が60分、語り部の青木有明氏による講話が30分という構成で、所要時間は合計90分であった。青木氏は大正11（1922）年生まれで満91歳、最高齢の語り部である。子どもの頃の暮らしと母親の発病前後の様子を中心に話された。当然のことながら、一人の場合と団体向けプランでは得られる知識も見学の印象も異なる。同じ展示に対し「違う見方」を幾重にも示すことで、メッセージは厚みを増すだろう。

団体見学に参加した後は、資料館2階にある資料室の検索システムを利用して、開館記念シンポジウム（開館式当日）の映像記録と、関係者の映像証言を視聴した。証言映像は証言者と話題ごとに5分から10分程度に編集されており、関心に応じて選択しやすく便利である。開館記念シンポジウムからはイ病を伝えることについて関係者の強い思いを感じ、この資料館の今後の活動がどのように展開するか、あらためて興味を持った。

14時半を過ぎたところで資料の閲覧を打ち切る。とやま健康パーク15時5分のバスで富山駅へ戻り、富山駅16時16分発のサンダーバード38号に乗車。新大阪駅にて27分の待ち合わせで19時59分発の新幹線みずほ609号に乗り、23時に熊本駅に到着した。

#### IV. 所 感

ごく限られた時間ではあるが、今回の取材により、イ病を語り継ぐ取り組みの一端を垣間見ることができた。イ病資料館は開館から2年目を迎えたばかりであり、展示も含めて活動が今後どのように展開するか興味深い。資料館の展示スペースには限りがあるが、健康をテーマとして国際健康プラザの他の施設（生命科学館など）と連携すれば、より多様な情報発信が実現すると思われる。



現段階では、イ病資料館の展示が示しているストーリーは比較的シンプルである。記憶の継承という観点から述べると、イ病資料館の展示では「公害克服」のストーリーが基軸になっており、「教訓とすべき失敗」については多くが語られていない印象を受けた。継承のためには、なによりもまず、人間の失敗から教訓や問いを導くことが語り継ぎの原動力（火だね）として必要である。そこで公害事件の資料館は「なぜ発生したのか」「なぜ被害が拡大したのか」といった問いについて、自然的メカニズムのみならず社会的要因からも説明する役割を負う。そしてこの問いが来館者の当事者意識につながるはずである。水俣病を例に挙げると、市立水俣病資料館のみならず水俣病事件の教訓が語られる場では、原因企業であるチッソの製品に我々が高度経済成長期のみならず現在においても深く依存しているという現実を突きつけられる。そしてこの指摘が、説明を受ける者の当事者意識を喚起する。現在享受している利便性が過去の公害事件と同根であるという認識に立つことから継承が始まるのであって、そうでなければ記憶の語りは聴く者の現在とは断絶した「昔話」にならないだろうか。イ病資料館では「克服した」というメッセージと、「現在も続いている」というメッセージの相克を感じた。この2つのメッセージはそもそも位相を異にするのだが、同一の空間では一方を強調すれば一方が霞んでしまうことは否めない。結果的には、「克服」を軸としたストーリーが選ばれているように見えた。

もうひとつの重要な切り口として、差別・偏見の問題がある。小学生向けの副読本なども含めて、イ病資料館の展示でも病気にまつわる差別や偏見について言及はあるのだが、それを積極的に掘り下げて紹介しようとしている印象は受けなかった。イ病の事例で地域社会の人間関係がどのようにどの程度損なわれたのかという点については、なににより筆者自身の勉強不足もあるが、資料館で受けた印象としては、当事者・関係者の口からもあまり積極的・具体的には語られていないようである。イ病は水俣病と比較すると社会学的研究そのものが少ないが、そうしたイ病研究においても「水俣病ほど激しい差別はなかった」旨の記載が見られる（飯島ほか、2008）。時代も地域も異なる事例で差別の激しさを比較すること自体に難しさもあるが、差別の具体的な証言が少ないことは、「克服」のストーリー構成とも関係しているのではないかと筆者は想像している。

高度経済成長の陰の部分が注目された時代背景のもとで「四大公害」という言葉が使われるようになったが、水俣病の事例と比較しながらイ病のストーリーを追ってみると、それぞれが異なる事例であることをあらためて実感できる。イ病は患者団体がイタイ協だけであるということ一つをとっても水俣病の事例とは対照的であるし、東京や大阪から学生が患者支援に集まったという話も聞かない。原因企業と地域社会、被害者団体の関係も異なり（神岡鉱山は岐阜県にあり、被害地域の経済的依存度は低い）、イ病の場合は神岡鉱山への立ち入り調査など「緊張感をもった信頼関係」が築かれているという。こうして様々な要素を突き合わせていくと、共通点を見出すことの方が難しいとさえ感じられる。言うまでもないことであるが、「公害被害者」と一括りにせず、イ病問題固有の背景を丁寧に読み解いていく必要がある。それは「なにをどのように伝えるのか」という当事者のテーマ設定についても同様である。イ病の語り継ぎに対する資料館関係者の強い思いを感じる一方で、記憶と教訓の語り継ぎに共通する困難にも関心を向けずにはいられない。

## V. 結 語

凄惨な体験を他人の求めに応じて繰り返し語るためには、語り手がその記憶を飼い慣らすと共に、語り慣れていかななくてはならない。よって、収まりの良いモデル・ストーリーに語り手自身が浸食されるという適応は起こりうる。見るべきものと聞くべきことが整然と取り揃えられた空間は、ともすれば紋切り型の「理解」を生産する場になるかもしれない。現在、小学生の社会科見学は公害資料館の利用において大きな比重を占めているだけに、限られた時間でなにをどのように次世代へ伝えるかは重要な課題である。

なにをもって来館者に問い掛けるのか。それは語り継ぎの活動と対象をどのような時間の幅で考えるのかということにも関わってくる。世代を超えて語り継がれるためには、起こったことや取り組みについての知識はもちろんのこと、それを伝えようとする熱意そのものが継承されなくてはならない。来館者数を示す数

字の中にどれだけの出会いが生まれたか、成果は計量的に推し測ることはできない。

筆者の訪問の翌月、平成25（2013）年9月には、イ病資料館の企画で「四大公害」の語り部が初めて一堂に会した。四日市市の資料館が開館すれば、「四大公害」という表象があらためて注目を集め、各資料館の連携の取り組みもさらに活発になるだろう。こうした語り継ぎの活動について、今後さらに取材と比較を進めたい。

## 謝 辞

今回の取材に御協力を頂きました皆様に厚く御礼申し上げます。特に、高木勲寛様、田中恒久様、村田信一様からは、多くの示唆を賜りました。感謝申し上げます。

なお、本研究は平成25（2013）年度熊本保健科学大学教育研究プログラム・拠点研究プロジェクトの助成を受けています（研究テーマ「公害病の記憶の継承に関する現地調査」）。

## 参 考

富山県国際健康プラザホームページ <http://www.toyama-pref-ihc.or.jp/> アクセス日：2013年10月31日  
飯島伸子・渡辺伸一・藤川賢，公害被害放置の社会学—イタイイタイ病・カドミウム問題の歴史と現在，東信堂，2008.